

恵みと真理のニュース



2015 年 7 月の三次 恵みと真理教会

韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net



[証]

三度の流産の末に生んだ息子を治してください、 全ての家族が礼拝し奉仕する生活をするように守って導いてくださった神様に感謝します

私は学生頃に教会に対する好奇心と友達から伝道されて教会を通いました。しかし、当時私と同じ初心者だった友達の言葉と行動に傷つけられ、その後からは教会を辞めました。青年になり兄弟に会い付き合いました。彼は篤実なクリスチャンでした。それで主日には私を連れて教会に行って二人で礼拝を捧げるのがデートでした。始めは彼と付き合うことが嬉しくて教会について行ったが続けて礼拝を捧げることによって御言葉の恵みと聖霊の働きで神様に対する信仰が出来ました。

結婚してアンサンで新婚生活をして恵みと真理教会のアンサン聖殿を支えるようになりました。その時には忙しいと言い訳をしてやっと主日礼拝だけ捧げました。子供を産んで区域礼拝にも参席して区域の子供達を見守る児童区域長の職分を受けました。しかし、職場生活で忙しくて世のことも好きだし以前の習慣になれていて信仰生活が疎かになりました。礼拝とも遠くなりました。

すると大きい試練が来ました。3回も流産になりました。このことを通して信仰状態を振り替えてみて悔い改める祈りをしました。神様の御言葉を愛するようになりました。礼拝時間に受ける神様の御言葉の一節一節大きい慰めになり希望になりました。世の欲望を下ろして神様の御言葉に従順して神様だけを仰ぐようになりました。すると神様は今度の二番目の子も与えてくださいました。本当に感謝しています。そして

神様は私が信仰生活を疎かにすると息子を通して悟らせてくださりすぐ悔い改めるように導いてくださいます。

二番目の息子が7ヶ月になり私の信仰が疎かになる時でした。何日間息子が何か食べるとずっと泣いて吐いてしまって病院に行きました。病院では腸がねじけたので大きい病院に行きなさいと言われました。大学病院に行く道に神様に切に祈りました。病院で子供を検査した医師は薬でねじった腸を治しますと言われました。

その話を聞いてとても恐くて心臓が震えました。それで旦那だけ手術室に入り私は外で涙だけ流しました。手術室で出た子供の泣き声が大きく聞こえて来ましたが、自分はやる事がなかったです。その瞬間私は切ない心で手を合わせて神様に祈りました。“神様、息子と治してくださいどんな事があってもひたすら神様だけを愛し礼拝も熱心に捧げます。神様の御心に従い忠誠します。時間が経って医師が私に話した腸がねじけてなかなか正常に戻らなくて切り開く手術をしなければなりませんと言われました。“赤ちゃんが手術をするなんて”もっと絶望的な状況になりました。何人の医者が忙しく手術準備する間倒れるくらい切に神様に祈る時、学課長教授達が他の事で手術室の前を歩きながら偶然にこのことを見ました。子供の状態を聞いて写真などを確認した教授が腸が正常になったのになぜ手術をするかと叱りました。涙が止まらなかったです。悲しみと苦しみの涙ではなく喜びと感謝の涙でした。その時口から出た言葉が“神様、感謝します”と言いました。その何日後、子供は無事に退院しました。その後私が礼拝を疎かにすると子供が肺炎や脱腸などの病氣

になり私の心を痛んで神様の前で悔い改めました。

私達がヨンインで引越してヨンインでも聖殿が建てられました。新しい聖殿で奉仕する働き人が必要でした。神様が私に教会学校の児童部の教師職分をくださいました。まだ全てが足りなかったですが神様の言葉に従順しました。そしてわついの信仰生活も首区域長に導かれ礼拝だけ捧げた生活から子供達を支え主のため奉仕する生活で発展して成熟になりました。そうしながら奉仕し献身する神聖な楽しみを味わうようになりました。子供達と共に生活して主の愛をもっと知り喜びと感謝することが増えてました。子供達が主の愛のなかで育つを見ると限りなく嬉しくて世では得られない幸せとやりがいを感じます。このように子供達を見守ることが出来て献身の機会を下された神様に感謝を捧げます。

もう教師として奉仕したのが10年になり去年、開いた教師セミナーで当会長牧師から勤続賞を受けました。まだ、足りないところが多くありますが心はやりがいがあり誇ります。その日牧師が教師に説教した御言葉通り従順して褒められ主の喜びに参与する教師になることを決心します。熱心に奉仕するように導いてくださり、子供達にも教会学校で熱心に礼拝と奉仕で主を喜ばせるように導いてくださいました。旦那も教会で熱心に奉仕する生活をするように導き助けてくださる主に感謝と栄光を捧げます。これからもっと全ての家族を守ってくださる主を委ね常に感謝することを希望し神様に祈ります。



[信仰コラム]

見おろされる神様

主は天から見おろされ、すべての人の子らを見、そのおられる所から地に住むすべての人をながめられる。主はすべて彼らの心を造り、そのすべてのわざに心をとめられる。

‘監察’という単語は‘詳らかに察して見おろされる。’という意味で解釈されます。神様が私たちが詳らかに察して見おろされるという事実がどんな意味を持っているかを調べます。

第一に、神様が私たちが監察するという事実は私たちに敬畏心と敬虔な姿勢を持たせてくれます。

人が不義して不正な仕事を行おうと思う時に奥まる所、暗い所を探ようになります。他人の目を避けるためであるからです。ところでその誰も避けることができない目があります。神様の監察する目です。神様が私たちが監察するという事実は罪を犯す者には恐れを持たせる一方神様の思った通りに住もうと努力する者には敬う心で深く懐む敬畏心と気を付けて行う敬虔な生の姿勢を持つようにしてくれます。

二番目で、神様が私たちが監察するという事実が聖徒に大きい慰労と喜びになって所望と力になります。

監察する神様によって助けを体験した人のお話が聖書にあります。イスラエルの族長ヤコブの話です。彼はすごい兄エ

サウを避けて母方のおじラバンが暮すハランまで遠くて大変な逃避の旅行をしました。そして非常に奸巧したラバンの家に泊まって彼の二人の娘と結婚をして 20 年間苦勞をしました。しかし神様の助けを着て相当な財産を集めるようになりました。家族と獣の群れを導いて密かに帰郷に上がったヤコブは一步遅れてこれを分かって追撃して来たラバンの責望に言い返しながら、たとえ母方のおじが自分に非情で奸巧するようになったがこのようにおおくの家族と財産を持つようになったことは監察する神様の恵みであったことを証しました。この世を渡っていたら奸巧した人々を避けることができません。しかし監察する神様を思って慰労と力を得てまじめで胆大に生きて行ってください。神様が時に付いて助ける恵みを施してください。神様が無視しないと絶望はないです。私たちがが頭頭に留めおかなければならないことは公義と愛を行うのです。私たちが不義と悪を行えば神様が私たちが無視するでしょう。三番目で、イエスキリストが私たちが監察するという事実をよく見ます。

肉体を着た神様がこの世の中で人々と一緒に暮らしながら人々を察して見たという事実はまことに感動的です。聖子神様であるイエスキリストは人生を眺める時憐愍を感じて治療と奇蹟を施しました。罪と呪いと疾病と貧乏に苦痛される人生がイエスキリストの助けを望んで来る姿を見て愛と権能を施しました。イエスキリストは神様の助けを望んで来る者等を無視

しないです。イエスキリストの目はこのような者等を監察します。皆さんの目がイエスキリストの目で見ると時途方もない衝撃が起きるようになります。皆さんの心と考えを変化させるでしょう。皆さんが当面した事態に対する正しい態度を決めさせるでしょう。ステパノが殉教する時たんたんとして死を迎えながら自分を石で打つ者のために容赦の祈りを残して死んだその威力がどこから来たことでしょうか？ステパノが目を見て神様の右にいらっしやるイエスキリストを見たと言いました。イエスキリストの目とステパノの目があいました。死の瞬間に彼がそのように荘厳で崇高で感動的な態度を取ることができたことはまさに彼を監察する神様を見たからです。

イエスキリストにあって啓示された神様は彼のつけた万物を通じて、人類の歴史を通じて、記録されたお言葉である聖書を通じて、聖霊の交通なさるのを通じて私たちに‘おっしゃる神様’です。私たちの言葉と懇求をきいて回答なさる‘きく神様’です。また私たちが詳らかに察して見る‘監察する神様’です。このような神様に対する知識と信仰による恵みが皆さんの生に常に一緒になさるように願います。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

携擧するのを慕いながら暮らしましょう



恵みと真理教会 チョヨンモク 牧師

ヨハネの黙示録にはその意味を解釈するのにどんな難しさのない部分がある一方非常に難解な部分があります。多くの部分が象徴的な言語と内容になっているからです。こんな部分をむりやりに解釈して断定的に言えばエラーを犯すことができます。“イエスキリストは歴史の主権者である。歴史は終末があつてその終末はイエスキリストの降臨に従うのである。終末に至るようになれば敵キリストが登場して大患難があるようになる。だから聖徒は異端の惑いに抜けないように気を付ける一方イエスキリストの再臨を待ちこがれながら初めて愛と初めて信仰を維持するように力をつくさなければなりません。この世の中の終末がどのように近づくかに対して人々はさまざまな側面で言っています。地球温暖化の現象で人類が滅亡すると言います。流星、小行星の地球衝突で人類が滅亡すると言います。また無分別な浪費と濫獲による資源枯渇と自然毀損で終末をもたらすようになると言います。あるいは核爆弾、細菌、化学武機などの大量殺傷武器が動員される戦争によって人類が終末を迎えるようになると言います。津波、地震、火山などの自然災害で人類が滅亡すると予測する人々がいます。抗生剤の濫用と恐れる伝染病によって人類が滅亡すると予測する人々もいます。しかしこんな原因によって世の中の終末が近づくのではないです。世の中の終末はイエスキリストの再臨で成り立ちます。再臨なさったイエス様が世を審判なさるその日には、天は燃えくずれ、天体は焼けうせてしまう（ペテロの第二の手紙、3:12）そんなにしても前持って指摘したこんなことに対して無関心なのではないです。こんなことが人類の終末を持って来ることではないが神様の再臨を知らせる徴兆であるから注意深く察しなければなりません。あがないに対する真理は聖書に明確に啓示されているがイエス様の再臨や千年の王国に関する聖書の言葉は一貫されて解釈をしにくい部分があつてさまざまな学説があります。その学説にはそれなりの根拠があります。千年の王国に対してはヨハネの黙示録 20 章に記録されています。

“この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。”（ヨハネの黙示録、20:6）このお言葉に対する理解の差で千年の王国に関して三種類の学説があります。第一、無天年説があります。千年の王国はイエス様の再臨の前にキリスト教の黄金時代があることを意味することでイエスキリストが親しく治める千年の王国と言うのは存在しないと主張します。イエスキリストが再臨なされば最後の審判をして悪人は永遠な刑罰に処するようになって義人は永生に入っていくようになるという見解です。第二、後天年説があります。千年の王国がある後にイエスキリストが再臨するという学説です。千年の王国という期間を象徴的に解釈します。

福音伝波を通じて世の中に義と平和がいつになる時期が千年の王国でその時にイエスキリストが地上に臨むという見解です。第三、前天年説があります。イエスキリストが親しく治める千年の王国が渡来する前にイエス様が再臨なさるといふ学説です。前天年説は二つで分けられます。聖徒が大患難をパスするという見解と聖徒は大患難をパスしないで携擧するという見解です。大多数の教団では聖徒が大患難の前に携擧するという学説に付きま

第一は、イエスキリストが空中に再臨なさるはずでその日にイエスキリストにあつて死んだ者等が先に起きて生き残った聖徒がまもなくであつたという間に忽然と変化されて空中で神様を迎接するようになるでしょう。

“すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあつて死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。”（テサロニケ人への第一の手紙、4:16,17）神様が聖徒が大患難にあわないように空中で神様を迎えさせます。“これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい”（ルカによる福音書、21:36）。“忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう。”（ヨハネの黙示録、3:10）聖徒は大患難を含んで神様の日に審判から除かれることを約束したお言葉です。

二番目は、世の中は 7 年間の大患難があるようになるでしょう。

正しい信仰がなく名前だけである信者は引き上げられなくて残って患難を経験するようになるでしょう。“そのとき、ふたりの者が畑にいと、ひとりを取り去られ、ひとり取り残されるであろう。ふたりの女がうすをひいていると、ひとり取り去られ、ひとり残されるであろう。だから、目をさましていなさい。いつの日にあなたがたの主がこられるのか、あなたがたには、わからないからである。このことをわきまえているがよい。家の主人は、盗賊がいつごろ来るかわかっているなら、目をさまして、自分の家に押し入ることを許さないであろう。”（マタイによる福音書 24:40-43）。“その日には、神が万物を造られた創造の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような患難が起るからである。”（マルコによる福音書 13:19）

三番目は、大患難後にイエスキリストの地上再臨があるでしょう。

“しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。”（マタイによる福音書 24:29,30）

四番目は、キリストが千年の間統治するでしょう。その期間にはサタンを縛り上げて底知れぬ所に閉じこめておくでしょう。

“またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手を持って、天から降りてきた。彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、そして、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた。また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊がそこにおり、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々がいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。”（ヨハネの黙示録、20:1~4）としました。

五番目は、千年の後にサタンを底知れぬ所に出しておきます。

するとサタンが人々を惑って聖徒を攻撃させます。“千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される。そして、出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために召集する。その数は、海の砂のように多い。”（ヨハネの黙示録 20:7,8）

六番目は、サタンと敵 그리스ドとにせ預言者を硫黄の火の池に投げます。

“そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。”（ヨハネの黙示録 20:10）

七番目は、最後の審判があります。

“また見ていると、大きな白い御座があり、そこにいますかたがあつた。天も地も御座の前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であつた。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。”（ヨハネの黙示録 20:11~13）

聖書は聖徒に神様の現れるのを切に眺めて慕いなさいとおっしゃいました。しかし大患難や敵 그리스ドの出現に対して備えなさいとはおっしゃらなかったです。そのことは聖徒の携擧の以後に起こる事であるからです。その代わり聖徒は“そして、死人の中からよみがえった神の御子、すなわち、わたしたちをきたるべき怒りから救い出して下さるイエスが、天から下ってこられるのを待つようになったかを、彼ら自身が言いひろめているのである。（テサロニケ人への第一の手紙 1:10）そして“これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから”（ルカによる福音書、21:28）しました。

今までよく見たとおり聖書は聖徒の携擧が大患難の以前にあることを明白に啓示しています。だから皆さんはイエス様の再臨がいくら近いかを分かるための目的に聖書に予言された終末の徴兆がどのように成り立っているかを察してください。聖徒の皆さんはイエス様の再臨を慕う者らしく大きい喜びを持って神様の仕事に力をつくしながら生きて行ってください。そしてもし私たちがこの世の中に泊まる間イエス様の再臨を当たるようになったらみなさんは皆が携擧する光栄に参加するように願います。